

【論考】

小学生のシャープペンシル使用禁止ルールについて ～文具の調和を考える～

奈良女子大学 文学部

三船千瑛子

<目次>

1. はじめに
2. シャープペン使用禁止の理由は玩具化か？
3. シャープペンにまつわるエピソード—インタビュー調査をもとに
4. シャープペン禁止のルールは必要か？
 - 4-1. シャープペンへの“誤解”をめぐって
 - 4-2. ノートとの関連性
 - 4-3. シャープペンの機能の進化
5. おわりに

1. はじめに

私と同年代の人であれば、小学生の頃に先生から「シャープペンは禁止」と言われた経験があるのではないかと。実際に友人たちに小学生の頃シャープペンシルの使用が禁止されていたか聞いてみたところ、多くの友人がイエスと答えた。では、なぜ禁止なのだろうか？ また、近年シャープペン禁止のルールがなかったり、高学年のみ使用許可が下りたりというケースが増えているらしく、シャープペンシルを使用する小学生は増えている。この傾向は、シャープペン禁止というルールが形骸化し、不要になっているからなのだろうか？ 本稿ではシャープペン禁止というルールについて論文やインタビュー調査などを参考にしつつ深掘りし、シャープペン使用禁止というルールが必要なのかを考察していく。

※正式にはシャープペンシルだが、以下シャープペンと記述する。

2. シャープペン使用禁止の理由は玩具化か？

文具の禁止ルールについては、本ゼミの過去の論考の中に「学校教育における文具と玩具の境界線」(寺田香奈子 2013)がある。この文献では、文具と玩具の関係を2パターンに分

けている。練りけしやロケット鉛筆のような玩具要素の強いもの（＝「玩具な文具」）と、文具そのものというより文具を使って遊ぶ（＝「玩具化する文具」）場合のふたつである。後者のように、学校で文具を玩具として使用する（遊ぶ）結果として、その文具の排除・制限（＝持参の禁止など）につながりかねず、その例としてシャープペンを解体して遊ぶことが挙げられている。「玩具化する文具」の例としてはほかに、三角定規の穴に鉛筆を指して回して遊ぶことや、消しゴムのカスを集めて練りけしを作ることなどが挙げられている。しかし、鉛筆や消しゴムなど例に挙げた文具のほとんどが学校で使用することが認められている一方で、同じ「玩具化する文具」でもシャープペンは学校で使用すること、持ってくること自体が禁止されている。このことから私は、シャープペンが禁止される理由は玩具化だけではないと考える。

続いて、文具の中でもシャープペンに特化した論文「シャープペンシル指導の体系化への提言」（鳥宮暁秀・杉崎哲子 2005）を検討する。この論文では、教育現場内でのシャープペンへの対処について教員へのアンケート調査が実施されている。シャープペン使用については、「学校全体でできるだけ使用しないようにさせている」が全体の3分の1弱、次の「担任の判断に任せている」が僅差でつづき、「学年によって異なっている」、「特に何もしていない」、「学校全体で全面的に使用を禁止している」という順になっており、「学校全体で積極的に使用させている」という回答はない、という結果になっていた。この論文は2005年に発行されたもので少し古いのだが、この時期に実際に使用禁止のルールがあったことが裏付けられている。またその対処をした理由の調査も行い、使用禁止の場合は「シャープペンシルは折れやすいから」という理由が半数以上で、「立てて持つから」という鉛筆の執筆法との差を意識した回答が1割ほどあった（これらは調査者側が用意した選択肢）。この結果からもシャープペンが禁止される理由が、シャープペン自体の機能に対してであることがわかり、やはり、シャープペン禁止の大きな理由は玩具化ではないと判断する。

そこで、小学生のシャープペン使用禁止についてより新たな見方で考察するため、シャープペンに関してインタビュー調査を行った。

3. シャープペンにまつわるエピソード—インタビュー調査をもとに

奈良女子大学において、この文具研究ゼミ生3人を対象に、小学生時代のシャープペンにまつわるエピソードをインタビュー調査した。その内容を、筆者自身の経験もふくめ4人分まとめたものが以下である。なおこの4名をここではA（出身：名古屋市）、B（出身：大阪市）、C（出身：石川県）、D（出身：福岡県）としている。

【禁止期間はいつまでだったか】

全員：小学校6年間ずっと。

【禁止の理由について先生方から説明されたことはあったか】

- B・C：された記憶はない。
- D：ただひたすらよくないと言われ続けた。(=理由なし)
- A：シャープペンで字を書くことになれるとまずいと言われた覚えがある。(まずい理由は不明)

【実際に小学校にシャープペンを持ってきていたか】

- D：学校には持って行かなかったし、クラスメイトもしぶしぶルールを守っていた印象。
- B：学校に持って行ってはいなかったが、友達は鉛筆に見えるシャープペン（以下：鉛筆型シャープペン／右図は参考例[オート社製のもの]）を使っていた。友人からシャープペンをプレゼントされたため持ってはいたが、家でしか使っていなかった。
- C：鉛筆型シャープペンは先端が不自然だから鉛筆削りで削って持って行っていた。女子はクラスの半数くらいシャープペンを持ってきていたと思う。
- A：クラスの親玉・ボスのような子が普通のシャープペン持ってきていてそこからクラスで流行したり、『ちやお』の付録に鉛筆型シャープペンがついていたことで流行したりした。
- B：『ちやお』は読んでいなかったけど文房具屋に鉛筆型シャープペンが売っていた。



※鉛筆型シャープペン（木軸シャープペンシル）はオート株式会社・北星鉛筆株式会社などで現在も販売されている。また、文具メーカーではないが marve products でも販売されていることがわかった。ただ調べた範囲では、鉛筆を使っているかのように見えるこの製品を、最大手といえる各メーカーは製造していない。理由が気になるところである。

【ルールの認識の仕方】

- A：入学時にシャープペン禁止と明言されたわけではない。持っていくと怒られるが持ち物検査があったわけではない。
- C：規則に書かれていたわけではないが、先生からは駄目だと言われた。
- D：同じく、規則にはないが教員によって指導されていたイメージ。点検などはなかった。
- B：使っているのが見つかったら注意されていた。自分よりも学年が上の兄や姉に伝え聞いていた人がいてルールが定着していたのかもしれない。
- A：使用禁止のルール自体は学校全体で認知されていた。

B：ルールを気にせずに使っている人はおらず、みんなバレないようにこっそり使っていた。

【学校外では使っていたか】

全員：家では使っていた。

D：勉強以外の書き物をするときにシャープペンを使っていた。

B：家で宿題をするときに使っていた。（家で使用することを怒られはしなかった）

A：そろばん教室の景品にシャープペンがあつて、そこで初めてシャープペンに触れた。

【シャープペンを使おうと思った理由は何か】

B：禁止されているから使うとカッコいいという憧れが生まれるのかもしれない。

A：学年が上がると書く文字数が増えてきて、鉛筆がすぐ丸くなるようになり、鉛筆だと削る手間が増えて面倒くさいと感じ、シャープペンは削らなくてよいので楽だと思った。

D：確かに書く文字量が増えてから鉛筆がすぐ丸くなるのが嫌だなと感じるようになった。特に私の学級では鉛筆削りの持ち込みが禁止されていたので不便だった。

C：高学年になって小さい字がかawaiiというところから小さく字を書くのが流行った。鉛筆の芯の太さだと書きにくく、シャープペンを使いたいと思った。

A：学年が上がるごとにノートのマス目が小さくなりシャープペンの方が書きやすいと感じた。

【質問外で得られた情報】

B：1年生のときはシャープペンに限らず赤ペンなどのペン類も禁止されていたかもしれない。ただ、ボールペンはいつのまにか使用が解禁されていた。

A：3年生くらいからでは？

D：学年は覚えていないが、ボールペンは学級費を使って全員同じものをもらった記憶がある。

B：3年生くらいが入学時の箱型の筆箱からチャックがついた布製のものや缶ケース型のペンケースに変わるタイミングで、鉛筆だけではなくペン類も収納できるようになり、そこでボールペンの使用が解禁されたのでは？

A：そもそも1年生の時に使っていた箱型の筆箱は鉛筆を差し込む構造になっていて、ペンを収納することができなかった。

B：赤鉛筆を最初に使ったときはみんな同じものを買って使っていた気がする。

A：入学セットみたいなものがあるのでは？

B：入学時に購入するものに、ある程度学校側の指定や推奨があるのではと思う。そうでないとあそこまで全員の持ち物の種類がそろわない気がする。

*

以上、インタビューの内容を簡潔にまとめさせていただいた。

インタビューでは、小学生の頃の記憶を頼りにエピソードトークをしていただいたため情報の正確さは欠けるかもしれないが、幸い4名の出身地が多様であったため、広い範囲の情報が得られた。その結果、4名で共感しあえるエピソードが多く、地域差はあまりないことがわかった。またインタビューから、シャープペン使用に関して以下の新たな発見があった。

■小学校時代のシャープペン使用のあり方について：インタビューまとめ

- ・鉛筆型シャープペンを使用している人が多くいた
- ・禁止のルールは明言されていないが暗黙の了解としてあり、学校で使用すれば注意された
- ・学年が上がるにつれて書く文字数が増え、ノートがマス目の小さいものに変化していく際に、小さい文字が書きやすく、鉛筆のように削る手間のないシャープペンの良さに惹かれる
- ・低学年の時に使う箱型の筆箱は鉛筆の使用が前提のデザインで、そこからペンケースに変わっていく過程でペン類の使用を始めるのではないか
- ・入学時に生徒のもつ文具の種類がある程度揃っているのは、小学校入学時に購入するものが学校で指定・推奨されたり、1年生の筆箱とその中身の定番があったりするのではないか

4. シャープペン禁止のルールは必要か？

シャープペン禁止のルールが現在も適応されているのか、SNSで「シャープペン 禁止」と検索をしたところ、小学生の子供をもつ母親などのツイート（最近書き込まれたもの）が複数見つかり、今現在もシャープペン使用禁止のルールが続いていることがわかる。そこで、今このルールが必要なかどうか、ゼブラ(株)の調査(2015年)・前掲の論文「シャープペンシル指導の体系化への提言」・今回の奈良女生インタビュー調査を参考にしつつ、(1)シャープペンへの誤解、(2)ノートとの関連性、(3)シャープペンの機能の進化の3つの観点から考えていく。

4-1. シャープペンへの“誤解”をめぐって

論文「シャープペンシル指導の体系化への提言」(鳥宮・杉崎 2005)では、シャープペンに関して一般的に正しく認識されていない部分が多いと述べている。例えばこの論文内での現場教師へのアンケートでは、シャープペンの芯は筆記した際の色が薄く、また弱い(折れやすい)ととらえている人が多いという結果がわかったのだが、シャープペンの芯がすべて薄くて弱いというのは誤解である。1960年代に大日本文具株式会社(現在のぺんてる(株))が、黒鉛とプラスチックを混ぜ合わせて作った細くて強いシャープ芯を世界に先駆けて開

発したが、黒鉛と粘土による鉛筆の芯に比べてシャープ芯の強度は当時でも 1.5 倍という優れたものだったという。現在は芯の種類も鉛筆同様に H(hard)や B(black)など様々あり、消費者自ら芯の濃さを選ぶことが可能だ。そのため芯の濃さや強度に関してシャープペンが鉛筆に劣ることはないのである。このように、現場の教師がシャープペンに対して誤った認識を持ってしまっていて、この誤解から禁止のルールができていたのであれば、誤解が解ければルールは不要になるのではないか。

なお、誤解であればそれをなくすことは必要だとしても、同時に、なぜそのような誤解が生じるのかという点も重要になってくる。小学校の教員として働いている人の中でも、少なくともその高校生・大学生時代、また、いまま職員室でシャープペンを使っている人は一定数いるだろう。教員もシャープペンの使用感は知っているはずであるのに、なぜ薄い・弱いと誤認しがちなのか。この理由を追究することは容易ではないが、大事なポイントであるため、おわりにで少し取り上げたい。

4-2. ノートとの関連性

インタビュー調査では、シャープペンを使いたいと思っていた理由として、小さい文字が書きやすいという良さが挙げられた。確かに日本語は英語に比べて文字の画数が多く、文部科学省の学年別漢字配当表を見ると3年生くらいから習う漢字の数も画数も増えていることがわかる。もちろん学年が上がるごとに学習内容も高度なものになり、漢字の画数に限らず書く文字数自体も増えていく。これに伴い、学年によって使用するノートが変化していく。ショウワノート(株)のジャポニカ学習帳適用学年一覧表を見ると、国語のノートでは、学年が上がるごとに段々と小さいマス目やマス目のないノートが推奨されるように変化していくことがわかった。学年によって使うノートの種類が変化し、より小さい文字を書くことが求められていくことは明らかだ。

ここで気づいたのは、ノートという書かれる文具が変化しているにもかかわらず、書く文具であるシャープペンが使用禁止のままであるのはおかしいのではないかということだ。鉛筆は書けば書くほど芯が丸くなり、太い字しか書けなくなってしまう。削ればまたある程度の太さには戻るが、私が通っていた小学校の学級では鉛筆削りの持ち込みが禁止されていて、それができなかった思い出がある(鉛筆が丸くなったので鉛筆削りを使いたいと教師に伝えると、家で削ってこないほうが悪いと理不尽に怒られたこともあった)。

一方、シャープペンは芯を繰り出していけば一定の太さで文字を書き続けることができる。このように、学年が上がり書く文字のサイズが小さくなる過程で、シャープペンがその良さを発揮し始める。それなのに禁止されてしまったのは、書く文具が書かれる文具の変化に置いて行かれ、取り残されているといえる。これは大変もったいない。ノートの変化と同時に書く文具が鉛筆からシャープペンへと変化していくことで、文具同士の調和がとれるのではないか。

4-3. シャープペンの機能の進化

ゼブラ(株)の「小学生のシャープペン使用実態調査」(2015年)では、全国の小学生300人を対象に親同伴のもと調査を行った。「お子様はシャープペンをご使用になっていますか?」という質問には、「家で使用」が31.3%、「塾で使用」が9.7%、「学校で使用」が8.6%、「使っていない」が48.5%で、約半数が日常的にシャープペンを使っているとわかる。また、この調査のまとめでは、小学校でシャープペンを禁止している理由の一つに、ペンの持ち方に慣れていない小学生は芯が細いシャープペンは折ってしまうという点があるそうだが、近年、各メーカーから鉛筆のように芯が太いシャープペンや、機能的に芯が折れにくいシャープペンが発売され人気がある、と述べられている。実際にゼブラ(株)は、シャープペンの芯折れによる集中力への影響を調べるため、脳波を計測する実験を行い科学的に実証することで新商品開発に活かしており、このような研究開発を経て、さまざまなメーカーでシャープペンのマイナス面を解消した商品が増えてきている。禁止ルールができた際にシャープペンが持っていたマイナス面を理由にしていたならば、そのマイナス面がさまざまなメーカーによって解消された今現在に、禁止ルールは成り立たないのではないか。

*

以上の3つの観点から、私は小学生のシャープペン使用禁止のルールは不要だと判断する。禁止のルールがあっても多くの小学生が3・4年生ごろからはシャープペンに触れており、インタビュー調査からも小学生のシャープペンとの出会い方がかなり自然だということがわかる。また、ノートという文具が6年間で変化していく一方、シャープペン禁止のルールが不変なのは好ましくない。そのため、小学生がシャープペンを手に取るタイミングで使用を許可して問題はないと私は思う。

また逆に、シャープペンの禁止を続ければ、小学生のシャープペンへの憧れに拍車をかける可能性があり、さらに、インタビューでも登場した鉛筆型シャープペンのような文具がルールの抜け道として登場、流行する事態となる。禁止ルールを撤回し、ルールの抜け道を発生させないことで子供たちの遵法精神を高めるか、もしくは、ルールを設けることでうまいルールの抜け道をあえて子供たちに学ばせるか……。これをどのように考えるかは難儀な問題であるため、本稿では指摘にとどめることとする。

5. おわりに

本稿では、本ゼミの過去の論考を踏まえシャープペン禁止の理由が玩具化だけではないことを判断し、インタビュー調査を経て、シャープペン禁止ルールがいま小学生に必要なのかを考察してきた。そして、シャープペンに対する誤解、ノートとのマッチング、シャープペン自体の機能の進化という3つの理由から、小学生のシャープペン使用禁止ルールは不要だという結論に至った。また、シャープペンへの誤解に関しては教師の側に、自分は大人

だから使えているが子供たちには無理だ、という思い込みや決めつけがあるのではないだろうかとも考えられる。もしそれが誤解だとすれば、小学生がシャープペンを使って濃く芯を折らずに書けることが実証された場合、誤解だということに気づく可能性もあるのではなかろうか。シャープペンをはじめ、多くの文具はこれからもさまざまに変化していくだろう。そこで今後は、思い込みに依拠するのではなく、変化する文具同士の調和を考えた指導が教室でも必要なのではなかろうか。

なお上記以外にも、シャープペンの禁止をめぐる気になる点は少なくない。例えば、小学校という教育の場には合理性だけでは説明ができない何か、いわば“鉛筆信仰”とでもいうべきものがあるのではないか、鉛筆メーカー全体との供給・需要関係が何十年もの間に固定化し変化を阻む面があるのではないか、学校鉛筆とシャープペンの単価の違いはどの程度関係しているのかなど、である。また、禁止ルールの必要性を考える上では、鉛筆支持派の意見により深く耳を傾けることも重要だろう。これらは今後の課題としていきたいが、いずれにしても、ひとつの文具を単体で捉えるのではなく、複数の種類の文具同士の調和のあり方という観点が重要であると思われる。

【参考文献・ウェブサイト】

- ・ 寺田香奈子、2013「学校教育における文具と玩具の境界線」『文房具——ぶんぐ大学への招待』（奈良女子大文学部人文社会学科文化メディア学コース編）

下記より閲覧可

<http://bun-gu-narajo.org/wp-content/uploads/2020/07/04%E7%AB%A0%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E6%96%87%E5%85%B7%E3%81%A8%E7%8E%A9%E5%85%B7%E3%82%BC%A02012%E5%A5%88%E8%89%AF%E5%A5%B3%E6%96%87%E5%85%B7%E3%82%BC%E3%83%9F.pdf>

- ・ 鳥宮暁秀・杉崎哲子、2005「シャープペンシル指導の体系化への提言」『静岡大学教育学部研究報告. 教科教育学篇』36：41～52

下記より閲覧可

https://shizuoka.repo.nii.ac.jp/index.php?action=repository_view_main_item_detail&item_id=7427&item_no=1&page_id=13&block_id=21

- ・ オート株式会社 商品一覧

<http://www.ohto.tokyo/ohto/eItemList.asp>

- ・ 北星鉛筆株式会社 製品紹介

<http://www.kitaboshi.co.jp/home/>

・marve marve products Wood PEN 商品一覧

<http://www.marve.jp/?mode=cate&cbid=1304869&csid=4>

・日本筆記具工業会 シャープペンシルの名前と由来

<http://www.jwima.org/sharp-pencil/01-1sharp-pencil/01-1sharp-pencil.html>

・文部科学省 学年別漢字配当表

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/koku/001.htm

・ショウワノート株式会社 ジャポニカ学習帳適用学年一覧表

<http://www.showa-note.co.jp/japonica/apply/>

・ゼブラ株式会社 小学生のシャープペン使用実態調査

https://www.zebra.co.jp/press/news/2015/1222_2.html

(調査年：2015年、調査対象：全国の小学生300人)

・ゼブラ株式会社 シャープペンの芯折れによる集中力への影響

<https://www.zebra.co.jp/press/news/2015/0109.html>

(調査年：2014年、調査方法：高校3年生男子1名に対する実験)

以上すべて最終閲覧は、2020年7月31日

■本稿書誌情報■

『文具に関する論考と企画：奈良女子大学文具ゼミ 2020』

〔2020年度「文化社会学演習」WEB版報告書〕 <https://bungu-narajo.org/>

2020年8月1日

編集・発行 国立大学法人奈良女子大学文学部

人文社会学科文化メディア学コース 小川伸彦研究室編

〒630-8506 奈良市北魚屋西町 E-mail ogawanobuhiko@cc.nara-wu.ac.jp
